句作で甦った戦争末期の少年の記憶

―書かれざる自分史の序章―

太田 泰直

はじめに

暑かった今年の夏、当時小学６年生であった戦争末期に思いを馳せていると、ゆくりなくも「伝単」という語が閃(ひらめ)いた。戦後一度も脳裏に浮かんだことのない語である。こんな語が実際、当時存在していたのかどうかそれさえ定かならず、広辞苑で確かめてみた。そこには「(中国語から) 宣伝ビラのこと」とあった。存在していたのだ。しかも当時連合国側であった中国の語として。そんな語を脳が覚えてくれていたんだ!

でも忌まわしい体験をしたことのない人には、今でも存在しなかった言葉だと思う。ということで、この言葉から次々に脳裏に甦(よみがえ)ってきた言葉を軸に、戦争末期のせいぜい10日足らずの期間の記憶を、拙句で詠んでみたいと思う。

①「伝単」にまつわる忌まわしい思い出

広島・長崎に新型爆弾（原爆）を落とした後、B29爆撃機の編隊による無差別空爆は影を潜めた。代わりに艦載機（戦闘機）による伝単の空中散布と、機長による気まぐれな機銃掃射が日本人の嫌戦気分を高める目的で毎日のように繰り返された。

峰雲や伝単拾ひ読みしこと

「絶対拾ってはなりません。毒が塗ってあって危険です」というのが小学生に対する大人の、いや軍部の禁止文句。だめと言われればやってみたくなるのが、子どもの好奇心。誰も見ていないのを確かめて拾った。こわごわ読んだ。残念ながらビラの文句は覚えていないが、後で入念に手を洗った。あの年の夏も、敗戦日を含めて暑かった。

機銃掃射浴びし八月十二日

急降下して機銃掃射を浴びせる気まぐれな操縦士が時々いたが、当たる確率は少なかったと思う。飛んで行く方向に一列に弾丸が落ちて来るので、１センチでもずれれば、狙われたショックは残るが、命に別状はない。

②玉音放送・奉安殿・遥拝・御真影

「玉音放送」や、「朕」という人称代名詞は後から知った語だが、大人に混じって小学校高学年も聞かされていた。電柱に括りつけられたラジオから流れてくる、雑音が多くて子どもには到底理解できない玉音放送だった。

玉音を聞けり奉安殿に向き

遥拝といふ語のありし雲の峰

空眩しかりし八月十五日

敗戦日あぶな絵覗き込んでゐし

最後の句。玉音放送が始まる前、呼び集められた子ども達の前にあぶな絵を広げて見せる不埒な大人がいた。「男女七歳にして席を同じゅうせず」で教育され、小学校でも男女別クラスに編成されていた当時、一人っ子の私は格別うぶで、おませな子らの嬌声をよそに、その場にいたたまれず顔を背けていた。

こんな記憶の、底の底に沈んでいた事実まで甦ってくるとは思いもよらなかった。

③灯火管制

高学年になると子どもながら毎晩交代で、「火の用心、戸締り用心」と声を張り上げ、拍子木を叩いて隣組を回っていた。電灯の明かりが外に洩れていないかチェックするのも役目の一つ。敵機の攻撃の的にされないよう、電灯の笠に黒い布をすっぽりと覆い外に洩らしてはいけなかった。

管制なき灯をまぶしめり敗戦日

管制解け灯火親しき世となりし

④原爆忌・広島忌・長崎忌

③の灯火管制までの句は、「伝単」という記憶の底に沈んでいた語に誘発されて甦った言葉から紡ぎ出した句。同じ戦争末期とは言え原爆を詠んだ次の拙句群は、何年も前から詠み継いできたものの中から選び出したもので、おのずから句の成り立ちが異なっている。

〔原爆忌抜粋〕

甦る『明日の神話』や原爆忌

教はりし鬼畜米英原爆忌

原爆忌想ふ原発再稼働

炉心溶けし被爆禍いつまで原爆忌

最初の句。メキシコで発見され修復された、岡本太郎の広大な壁画。

〔広島忌抜粋〕

繰り返す過ちあはれ広島忌

広島忌原民喜の名伝はらず

川に撒くボトルの水や広島忌

広島忌自死せし詩人忘れられ

３番目の句。市内を流れる大田川にて或る年に詠んだ。最後の句は、原爆詩人峠三吉。

〔長崎忌の抜粋〕

長崎忌鐘が鳴るなり天主堂

思ひ出す永井博士や長崎忌

テロに遭ひ逝きし市長や長崎忌

最後の句。記憶が定かでないが、確か市長選の際、現職市長が演説中、暴漢に襲われ死亡されたように記憶しているが、事実誤認であればこの句を抹消するにやぶさかではない。

（No.222　平成25年８月）

ある高齢者の「綺想曲（きそうきょく）」

大野 達郎

「ひとは物語りながら自分の生（せい）を生きています」

これはずいぶん前に目にした河合隼雄氏の言葉ですが、この高齢者は最近、なぜかこの言葉をよく思い出しています。河合氏はこの言葉の説明で次のような例をあげていました。結婚を目前にしたカップルが街を歩いていて、男性が、突然歩道に飛び込んできた車にはねられて死亡したとします。残された女性は号泣して「どうして?」と絶叫するでしょう。この問いに対して、医者は男性の怪我の状態を詳しく説明したあと「死因は脳挫傷です」と答え、警察官は加害者の職業などを説明したあと「過労による居眠り運転」が原因ですと答え、あるいはまた評論家などは日本の「貧弱な道路事情」がこうした悲劇を引き起こす、と解説したりします。しかし、これらの答えはいずれも彼女の問の答えになっていません。もっと言えば、誰も彼女の問に答えることはできないでしょう。何故なら、彼女は、自分の生を物語として紡ぎながら生きてきたのに、その物語が突然破壊され、物語の続きが紡げなくなったことに対して「どうして?」と悲痛な叫びを上げているからです。物語が紡げなくなったとき、人の心は深い闇に包まれ、重く病むのです、と。これが河合氏の説明でしたが、このあと河合氏は、心理療法家とは、クライアントが自分の生の物語を紡ぎだす手助けをする仕事なのだと語っていました。

最近、この高齢者が河合氏の言葉をよく思い出すようになったのは、わが身を振り返って、あの頃の自分はどんな物語を紡いでいたのだろうかということを、ちょっとした節目ごとに思い出してみることが、ことのほか楽しくなったからです。苦笑しながら、間抜けな物語を紡いでいたものだ、と思い出すのも悪くありません。若いころの恋愛や結婚についても、自分の紡いだ物語は「つける薬がないとはこのことだ」というのにふさわしい代物（しろもの）であり、ずいぶん心を熱くして参加したデモなども、今から思うとお粗末ないかがわしい参加だったなあ、と思ったりしています。この高齢者に欠けていたものは、読書量や思考力であり、さらには謙虚な学びの態度だったわけですが、今となっては、〝あどけないことよ〟と慈しみほほ笑んだりしでいます。

問題は、70代に突入したこの高齢者が、今、自分の毎日をどう物語り、その先にある自分の死を、その物語の中にどう織り込んでいくかということのようです。この高齢者は、よく「散る桜、残る桜も散る桜」などと独り言をいい、強がっているだけかな、と自問したりもしていますが、どうやら自分は自分の死を受け入れるのに吝（やぶさ）かではないようだ、少し投げやりかも知れないが、この点に関しては充分に諦観の域に達しているようだ、などと思っています。そして、これもまあ、お粗末であったとはいえ、今日まで無事

に生を営むことのできた御蔭（おかげ）ではないか、有難いことだと思ったりもしています。しかし、時には、この高齢者の耳の奥で、「余命６か月と宣告されても大丈夫かな」と例の天邪鬼（あまのじゃく）が囁き、この高齢者を慌てさせています。

養老孟司氏は、死には人称があり、悲しいのは二人称の死、つまり「あなたの死」であって、三人称の死、つまり「彼らの死」は客観的な事実に過ぎず、一人称の死はない、と述べていました。何故なら、自分の死を確認する自分がいないので、「私の死」は確認できないからだ、というのです。科学者らしく彼は堂々と述べていましたが、この高齢者はこの考えに与（くみ）していません。この高齢者は、死の恐怖とは、死ぬかも知れないと思ったときの心の慄（おのの）きや身体的な苦痛のことであって、多分、誰にとっても死そのものは安らかだ、そうに違いない、と思っているからです。この高齢者が紡ぐ物語の中で最も避けたい光景は、真夜中、不治の病の床で眠れなくて、自分は間もなく死ぬかもしれないと、一筋の涙を流している姿です。この高齢者にとってこれこそが死の恐怖なのです。

そこで、この高齢者は次のように考えることにしました。そんな状況になるのは、きっと、昼間することがなくて、やみくもにまどろんでいたからだ、たとえ闘病中でも「死ぬまでに完成させたい仕事」を持っていて、起きている時はその仕事に熱中していれば、夜はぐっすり眠ることが出来るのではないか。痛みはもちろん取り除いてもらう。少しの苦痛や疲れには敢然とした意志で立ち向かい、仕事の完成に没頭する。そうすれば夜は熟睡できるはずだ。

そこまで考えたとき、この高齢者は、中学１年のときに読んだ波多野勤子著の『少年期』の中の一コマを思い出しました。主人公は中学受験を控えた旧制の小学６年生。場所は東京で、時代は頻繁に警戒警報が発令されていた大戦末期。主人公は夜の警戒警報に起こされて、そっとトイレに立ちます。廊下を恐る恐る通ると次の部屋から灯火管制をした明かりが漏れています。そっと覗くと、父親が円形の光の中に本を置いて読み耽っていました。主人公は「お父さん、警戒警報だよ。どうして寝ないの?」と聞きます。父親は「ああ太郎か。お父さんは死ぬまでにどうしてもこの本を読んでおきたいんだよ。太郎は死ぬまでに寝ておけばいいのかい」と言ってほほ笑みます。日ごろ家事一切を母親に任せて、書斎ばかりにいる父親を軽蔑していた主人公でしたが、この一言に衝撃を受け、それ以後、父親を少しだけ尊敬するようになります。この高齢者もまた、中学１年のとき、これを読んで雷に打たれたほどの衝撃を受けたことをよく覚えています。「死ぬまでに完成させたい仕事」とは、『少年期』」に出てくる父親のような時間の使い方のことなのでしょう。

現在この高齢者は、死ぬまでにどうしても完成させたい仕事を持っていません。これこそが「お恥ずかしいことよ」と自嘲せざるを得ない点ですが、今は模索中で、近ごろ少し明かりが見えてきたかな、などと思っているところです。数年前、この高齢者の家で「こーえ」と呼んでいた物置を取り壊すことになりました。江戸末期の建物で、床の間付きの８畳と４畳半からなる陋屋の中は、長年にわた

るガラクタの山でした。解体業者に一括廃棄という手もありましたが、それでもと思い直し一応目を通し、その中から数十点の古文書を見つけました。しかし、どれも読めません。やむなく歴史資料館に勤める友人に見てもらったところ、4～5点の綴りが第一級の資料だと言うのです。内容は、慶事の贈答記録で、大変珍しく、弔事の記録よりも当時の生活実態が鮮明に読み取れ、これこそこの地方にとって最も貴重な資料だというのです。そんな解説を聞きながら、読み説いてもらいましたが、この高齢者にとっては、記載されていた品々よりも、行間から溢れるご先祖様の息遣いにこそ深い感動を覚えたものでした。

自分が死んだらこの世から消えてしまうこと、この世で自分しか知らないこと、それは子どもの目を通した小さな記憶に過ぎないのだが、あの激動の歴史の中で懸命に生きた祖父母や両親の生活の一コマを、オムニバス風に記録に残そう、これがこの高齢者が見つけた一条の光です。読者はもちろん子どもたちや孫たち、そして甥や姪とその子どもたちです。誰に阿（おもね）ることもなく、すべてを自画自賛で貫き、誠実にドキュメントを重ねればよい、とこの高齢者は思っています。そんなことを思うと幾つものショットが眼前に浮かびます。昭和19年の晩秋、日がとっぷりと暮れた雨の中を、ずぶ濡れになって祖父が帰って来ました。持っていた雨合羽やフードを両手に提げたバケツにかぶせ、自分は頭からも頬からも滴をたらしていました。戸口に走り出た祖母も母も大騒ぎする中、祖父は「ゴタゴタ言う奴がいて、遅くなった」と言っていました。それは配給の日で、バケツからは砂糖や魚やタバコ（きざみと紙）などが濡れることなく次々と取り出され、子どもたちが歓声をあげているショットなどです。

セピア色に変色した祖父母や両親のアルバムも残っています。これをデジカメで複写し、我が国の現代史の中に落とし、自分流にすっきりとした解説をつけて編集し、CDに焼きつけたら面白いのではないか。この高齢者は、自分の覚束ない技術力を棚に上げて、夢を膨らませています。

この「綺奏曲」もまた、何時の日か「お粗末な物語を紡いでいたものだ」と思う日が来るかもしれないことを、この高齢者は楽しみにしています。

（№169　平成21年3月）

文楽の楽しみ

笠井 紀世史

最初に文楽を観たのは小学生の頃なのでもうずいぶん昔になります。母の実家が、大阪の本町というところで呉服屋を営んでいたこともあり、大阪商人文化の粋ともいうべき文楽に接する機会が他の子どもと比べて多かったように思います。義太夫の独特の節回しと三味線の太い音色が今でも記憶に残っています。今は、退職後に入った「友の会」から送られてくる案内を読み、大阪日本橋にある国立文楽劇場の定期公演に年に数回ほど足を運ぶのが楽しみの一つになっています。以下、文楽鑑賞の楽しみを数点挙げてみます。

人形を遣うということ

文楽は通常の演劇とは趣がずいぶん異なります。舞台からは音は聞こえてきません。義太夫の語りと太棹の響きが音による描写のすべてです。舞台はいわばパントマイムの無言劇であり、音と言えば下駄の音が時折聞こえてくる他は三人の人形遣いの息づかいが伝わってくるだけです。舞台上から台詞が降り注ぐ芝居が当たり前のように慣れている観客には、この舞台設定自体が奇異に感じられるかもしれません。

眼で見る精神世界

役者は生身の人間であり、その役者が持つ肉体の機能（表情、声、所作等）を通して演技が行われます。一方、人形遣いは直接自分の肉体を使って演技をするのではなく、人形という媒体を通して自己表現をします。人形という形を通して観客が知るのは、人形遣いが表現したいと思っている純粋に昇華された精神世界です。そこには何らの雑多な物理的要素が介在しません。ごまかしのない真の精神世界が展開します。

人形は年をとらない

歌舞伎は文楽から題材をとった演目が多いのですが、その中でも近松の心中物は人気があります。若い男女の恋愛悲劇をかなり高齢の歌舞伎役者が演じるわけですが、演技者が人間国宝といえどもやはり年齢的に違和感があるのは否めません。舞台を観る観客は外面的な姿形にまず目を奪われます。役者の芸への理解が深化しても役が求める肉体の美と一致し、精神の高みと調和する時期は残念ながら限られています。文楽はどうでしょうか。人形を操る人間の芸は年齢とともに深くなり、精神性はますます高くなりますが、人形の美しさは変わりません。人形は演じる者の外面的な変化を隠し、精神性だけを浮き立たせます。先年87歳で惜しくも他界した吉田玉男は「曽根崎心中」の徳兵衛を千回以上も演じました。ちょうど1,111回目に当たる舞台を平成14年8月に観ましたが、「天神森の段」で簑助が遣うお初の後ろ姿が反り返り、右の指が微かに揺れ動く最後の場面を観たとき、あまりの美しさに自然と涙が出たことを覚えています。

能との共通点

時々、名古屋能楽堂に観能にでかけます。能の一般的なプロットについては、また機会があれば紹介したいと思いますが、文楽を観ると能舞台で面をつける意味が少し分かるような気がします。面は文楽の人形と相通じるものがあるのではないでしょうか。

文楽のすばらしさ

劇作家の三谷幸喜さんが今夏、初めて文楽の新作を手がけるそうです。文楽は10年ほど前に初めて観たとのことで、「人間の役者は死ぬ場面で本当に死にはしないが、文楽は人形遣いの手が離れた瞬間、魂が抜け、亡きがらとなる。怖い、すごいと感じ、独特の世界観に魅せられた。いつか手がけたいと思った」という感想を述べています。私も昨年秋の「仮名手本忠臣蔵」四段目や六段目の切腹の場面で同じ感想を持ちました。

人間が表現できるすべてを出し尽くすことができるものが文楽です。舞台芸術の極致と言っても言い過ぎにはならないでしょう。本拠地大阪に芸術に疎い首長がいることは誠に残念ですが、日本橋に出かけて日本人が創り上げた究極の美をぜひ堪能してみてください。

（No.221　平成25年７月）

再生の到来

金谷 鎬二

現代社会は、経済的にも物質的にも進化してきました。一方、精神的、生物的、宗教的には衰退しているといえるのではないでしょうか。

戦後、個人尊重の思想が重視されるあまり家庭や地域社会への共同参加意識が大幅にうすれ、あまりにも自己中心的な考えによる事件や事故が多発して、大きな社会問題になっている現実があります。言うまでもなく、自由が行き過ぎると極端な自己中心に陥り、利己優先の風潮に流されやすい、いわゆる許容社会を生み出してしまいます。

１世紀ほど前、国際人新渡戸稲造は、英語で出版した『日本の魂』の中で、「いつでも失われぬ他者への哀れみの心」こそ武士に似つかわしいと書きました。弱者や敗者への「仁」であり「武士の情」「惻隠の情」のことです。

私の敬愛する後輩内田富夫先生の友人、数学者藤原正彦先生が、ベストセラー『国家の品格』でもそうした側面を強調し、武士道精神の復活こそ日本の将来の最優先課題と唱えてみえます。

教育は根本的に保守的な事柄です。教育の技能、スキルが進歩的な取り組みであっても、教育の本質は永遠にコンサバティブなものでしょう。であるが故に、教育といえば「若い児童生徒たちに民族の文化的遺産を伝承する職務」ということになります。具体的に表現すれば「学問、道徳、芸術」という民族の遺産の継承ということであります。

道徳教育の意義付けが、第１次安倍内閣のとき決定され、教育基本法に「道徳心」を培うことが明記されました。第２次安倍内閣が発足し、政策の柱に「経済再生」アベノミクス「三本の矢」と「教育再生」の二本柱を明言しました。それは私の目指す「教育ルネッサンス」そのものであり、大きな期待に胸おどらせているところです。

道徳と教育に関して、先ずは首相官邸のホームページから抜粋したものを提示したいと思います。

『学校における道徳教育の基本的考え方』

(1)生きる力の核となる豊かな人間性

「生きる」とは変化の激しいこれからの社会で、他者と協調しつつ自らの課題を見つけ、自ら考え、意欲をもって行動し、よりよく問題を解決できる力であり、「豊かな人間性」はそのための核となる重要な要素である。

〈豊かな人間性とは〉

- 美しいものや自然に感動する心など柔らかな感性
- 正義感や公正さを重んじる心
- 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- 自立心、自己抑制力、責任感、道徳的価値
- 他者との共生や異質なものへの寛容など

(2)子どもの道徳性を育てる

道徳の目標では「道徳的な人情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性」を養う。

〈道徳教育で育てる道徳性〉

・道徳的心情、道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情
・道徳的判断力、それぞれの場面において善悪を判断する能力
・道徳的実践意欲態度、道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性
・道徳的習慣、長い間繰り返して行われるうちに習慣として身につけられた、望ましい日常行動の在り方

(3)学校教育全体で行われる道徳教育

「生命尊重」を豊かな人間性の育成指導する場合、各教師、特別活動、総合学習の時間で、命の大切さに触れさせ、じっくり考えさせ、深める。道徳教育の趣旨を理解し、児童生徒の実態を把握しながら、学校教育全体を通じて、計画的に指導する。

教科書は使用義務が法で定められています。しかし道徳は教科ではないために、教科書の使用義務はなく、検定を経ることなく、指導要領との適合が不十分な副読本が学校現場で多数使用されている現状です。道徳が教科でない故に、教職員が指導要領や教授法を習得することなく教壇に立っています。また「道徳」は戦後一貫して正式な「教科」でないため、「道徳」の時間はこれまでさんざん悪用されてきた過去があることは明白です。

いずれにせよ、「道徳の教科化」は教育界に残された「戦後レジューム」を払拭する大きな鍵でしょう。また、授業の中で、児童生徒に多くの偉人伝を読ませ、誇りうる日本人をとり戻す教育、先人に尊敬と感謝のできる人間教育こそが急務であると思うのです。

（№219　平成25年５月）

外から見た日本

小木曽 照行

「失われた日本20年」、そして「災後」、再生は未だしである。

英エコノミスト誌の『2050年の世界』はメガチェンジの時代に入った世界について大胆な予測をしている。グローバリゼーションは進みアジアの世紀が訪れる。しかし、日本については現状のデフレを日本型と言い、人口比で科学部門のノーベル賞受賞者はわずかなどと触れながら、「相対的に、急速にプレゼンスを失っていく」という。世界史上最も高齢化の進んだ社会となり、そのGDPは韓国の半分になるとされる。現在もなお開かれた国として第１の債権国がである。悲観的な話である。

昨今内外ともに日本衰退論が溢れている。わが国は今危機、禍機、転機にあるといってよいであろう。国力とは何か、人口（動態）・経済・資源・軍事・科学技術・文化・教育力などの総合力であろう。

さらにCIA（米中央情報局） のかかわる国家情報会議は「世界潮流（グローバル・トレンド）2030」で、アジア復興、米国は経済力やハード・ソフトパワーの優位性の後退は進むが、しかし米国に代わる覇権国家は現れない（覇権国は無くなる）と予想し、中国は20年代にGDPで米国を抜くとは言え、労働力人口の減少でその成長は終わるとする。中国の繁栄は長続きしないことは『50年』も指摘している。日本については高齢化、人口減の苦境を挙げ経済の「緩やかな相対的後退」を予測している。

歴史は国家の興亡盛衰を記録している。日本は現今南欧型とまで言われる。知日派の外国人は懸念、示唆、提案等を示している。かつて『Japan as Number One』（1979）を著したエズラ・ボーゲルは最近、政治的混迷とデフレ等で成長構造を失つたと指摘し、外国に学べとも言っている。彼はまた著名な中国研究者で『鄧小平伝』を著している。ビル・エモットは『変わる世界、立ち遅れる日本』（2010）で知識サービス産業での日本の成長を説き、『なぜ国家は壊れるのか　イタリアから見た日本の未来』（2012年）では、「驚くほど重なる日本とイタリア」で日本に示唆を与え、一方ではノーベル賞に励まされたEUの行方も意識している。なおイタリアは今年２月総選挙で始まる。高齢のロナルド・ドーアは、最近の『日本の転機』（1912）で、3、40年後米中冷戦による勢力均衡は西太平洋で変化をもたらすとし、日本は「米中の狭間でどう生き残るか」を副題としている。

「尖閣」問題など危機的様相を見せ、中国との「戦略的互恵関係」も放置できない、「災後」とりわけ日米軍事同盟の意義が、第３次に及ぶ「アーミテージ・ナイ報告書」を待つまでもなく、その重要性を増している。歴史的使命として中華文明の復興を志す「眠れる獅子」の台頭、西太平洋進出の動きとともに、北朝鮮の核問題も随伴しつつ、アジアの世紀は不安定な表情を覗かせている。アメリカも

太平洋国家として「自由と民主主義」の旗を掲げて慎重に対峙し、時に新冷戦が始まっているとも言われる。日本の立ち位置も明らかになってきた。

ジェニフェール・ルシュールがゴンクール賞受賞の、フランス人の眼で見た武士『三島由紀夫』を描く。その自決現場に駆けつけ2年後に逝った川端康成のノーベル賞講演『美しい日本の私』も忘却の淵の中から甦る。仏詩人・駐日大使であったクローデルは昭和18年の秋（1943年太平洋戦争の曲がり角、4月山本五十六戦死、10月学徒壮行会の年）、パリで「私がどうしても滅びてほしくない一つの民族があります。それは日本人です。彼らは貧しい。しかし、高貴である」と語っている。大和の国、山あり谷もあろうが、仕切り直しの時である。本年は霊峰『富士山』・『武家の古都・鎌倉』の世界文化遺産登録の結果も明らかになる。

（№215　平成26年1月）

小子内探訪

近藤 篤

柳田國男の書いた「清光館哀史」という随想がある。筑摩書房の国語教科書「現代国語」の教材として取り上げられ、いまも筑摩の教科書（「展望　現代文」）には掲載されているので、まことに息の長い定番教材である。

国語の教員になってたびたび授業に取り上げてきた。しかし、法悦のために死者の霊を慰めるという儀礼と、性の解放をも暗示する陶酔が、年に一度、女ばかりで踊る「盆踊り」に込められていること、そして、「遣瀬無い生存の痛苦、どんなに働いてもなほ迫って来る災厄」などがあればこそ、癒やしの必然性があることを、生徒に理解させるのは至難であった。「痛みがあればこそバルサムは世に存在する」（バルサムは鎮痛剤）という重い言葉を、生徒の心に刻むことができたのだろうかと今も反省する。

「清光館哀史」の舞台となった陸前八木の小子内に行きたいと思ったのは、東北大震災の直後である。石巻市に伝わる国指定重要無形文化財「雄勝法院神楽」を伝承してきた新山神社は津波で消滅したという記事（平成23年４月28日中日新聞夕刊）を読んだ。「浜辺の月」「清光館哀史」に描かれた「小子内」の村もおそらく、盆踊りとともに消滅してしまったのだろう。この目でどうなったのか、いつか確認したいものだと思っていた。

しかし、その機会は意外に早くやってきた。今年の夏、盛岡の友人に会うために、東北を旅する機会があった。４泊５日の、ひたすら車で走るだけの弾丸ツアーであったが、さいわい、気にかかっていた小子内も経路に入れて、思いを果たすことができたのである。

陸中八木駅前に車を止めて、まずは小子内の村を探した。柳田が言うように、「僅かな丘を一つ越えて見ると、その南の阪の下が正にその小子内の村であった」。

ここらあたりではないかと見当をつけたところで、一人の老人が草刈りをしている。清光館のことを訪ねると、ここだよと言う。この方は、老人クラブの人で、ボランティアで、清光館跡の草刈りをしていた。私は自己紹介をして、ここに立ち寄る人がいるのかと聞くと、「いろんな人がここを尋ねてくれる。この前も、神奈川県の大学の先生と学生たち何人かがここに来た」とのこと。まことに文の力は偉大である。

津波は大丈夫でしたかと聞くと、「ここは、12メートルある防波堤のおかげで、津波の被害は免れた。だから、この石碑も流されることはなかった。この防波堤は、元総理の鈴木善幸さんの鶴の一声でできた。村人もみんな救われ、いまも盆踊りをやっている。陸中八木でも人は死ななかったが、駅舎も郵便局もだめになった」。何はともあれ安堵した。

ところで、清光館の跡地に立てられた碑文は昭和59年８月に「柳田國男先生と清光館を偲ぶ会」が撰したものである。簡にして要を得た名文である。柳田が、「浜の月夜」と「清光館哀史」を書いたいきさつ、岩手県の北海

岸の、小さな一集落が社会に知られるようになった感謝の念が淡々と述べられている。その末文には、「この時から60数年を経ました今日この頃も、柳田先生の足跡と小子内浜を慕って、数多くの旅行者が『清光館』跡を訪れて参ります。柳田先生の遺徳を偲び今は無き「清光館」の面影を抱いて訪れる人々のために、又後生の目標ともなるものを建立して、『小子内浜』を世にあらわした先生の恩義に報いたいと思います」とある。この文を撰述した人には、柳田を感動させた、あの純朴な清光館亭主のもてなしと同じ心根があると思った。

（№225　平成25年11月）

「躾（しつけ）」と「環境」・子育て支援

佐藤 嘉國

「躾」と「環境」

こんな話がある。今から200年程前、南フランスのアベロンの森で一人の少年が見つかった。年齢は11～12歳と推定された。少年は木の実や草の根を常食とし、まっ裸で、肌や髪は薄汚く、時折唸り声を出した。知能は、極めて低く、記憶力、判断力、思考力に欠け、人間を怖れ、発作的な動作や痙攣を起こし、絶えず体を揺すぶり、意に背く者には噛みついた。少年は４歳～５歳頃に捨てられ、教育の機会に恵まれず、社会的な観念、態度、習慣を身につけることが出来なかったと思われる。

また、1912年に、インドのカルカッタ西南のジャングルで７歳と２歳ぐらいの二人の女の子が、狼の穴の中で発見された。そして、狼の習性が強く、胸や肩に長い毛が密生し、四つ足で歩き、生肉や腐肉に口を直接つけて、食べ、暑いときは犬のように舌を出してあえぎ、昼間は眠っていて夜になると動き出し、異様な声で遠吠えする状態であった。孤児院での神父さん等の熱心な指導により、１年で直立歩行は出来たが、人間らしい表情になり、自分で着物を着るようになったのは６年目であった。

この二つの話は、人間が人として育つには、「躾」とその「環境」の重大さを訴えている。

昨今の引き続く少年問題で家庭での躾への要望が高まっている。また、社会環境も見直しが始まった。

「家庭での躾」についても、危惧されることが多い。あの、成人式で来賓の祝辞を静かに聴けないエチケット知らずの新成人達が、親として子供にどんな躾が出来るのか。また、地域のコミュニティー活動も盛んになったが、子供たちへの教育は弱さを感ずる。学校五日制完全実施も早まり、家庭・社会・地域の教育力を必要とする。その強化こそ急務である。

子育て支援

子育て支援の会で話を頼まれた。対象は２、３歳児の母親達である。

同居の孫（２歳半の女児）の行動を参考にしながらこんな話（要約）をした。孫と生活していると、意外なことを体験する。１歳半（靴を履き、よちよち歩き）の頃、玄関で靴を脱がせてやったら、その靴をきちんと自分で揃えるのに驚いた。いつも母が下履きを揃える姿をみての行為であろう。母のお勝手仕事の手伝い、庭の草取りを喜んで、自発的に一緒にやろうとする。まさに、「子は親の鏡」である。幼児には、身近な母の行いが一番の手本となる。

数年前のこと、コミュニティーの運動会に招かれた。開会式のとき、前から順に子供達、子供会の親達、地域の役員等と並んだが、母親達の私語の甚だしいのに驚いた。来賓の挨拶なんて上の空。小学校の授業参観の時も親達の私語が目立つと聞く。後で、子供会の親と話す機会を得、子供会は何のためにやるの

かと正してみたことがある。

良い子に育てようと思ったら、自らの行動が大切です。「早寝、早起き、朝ごはん」規則正しい生活習慣をしていますか。お母さん方、早く起きて朝ご飯を作っていますか、コンビニ弁当やモーニングサービスではだめです。勤勉な規則正しい愛情ある親の姿こそ、健全な子供を約束します。

前にこんな話がありました。電車の座席に靴履きで上がって暴れている幼児に、隣の座席の人が見かねて注意をしたら、幼児の親が「うちは、伸び伸びと育てているのだから、注意してもらっては困る」との苦情である。考え違いも甚だしい。躾があってこそ、子供は伸び伸びと育つ。駄目なことは、どしどし駄目だと言いなさい。自主性や自立心は自由奔放、放任主義の中では育たない。

算数が嫌いになるのは小学校3年生である。このころになると、基礎力や筋道をたてて考える力が必要になる。学校側のせいにしては損をする。余裕を持って、授業に臨む基礎力や態度や勉強の習慣をつけてやるのは家庭での親の役目である。それは3歳の頃から始めなくてはならない。子育て期間は長い人生から見ればほんの僅かである。子育て中心の生活を大切にして欲しい。「三つ子の魂、百まで」と言う。“成績が悪い”“勉強せよ”と言った苦情や叱咤激励だけでは、成績は上がらない。本人も“どうしたら成績が良くなるか”“勉強に取り組めるか”悩んでいる。そうなってからは手遅れである。

野球の天才と言われている、大リーグのイチロー選手の父親の教育、またよく例えられる森鴎外や野口英世の母の努力や姿は是非参考にしてもらいたい。10数年前成人式での態度が問題になった頃の人達が親の年代となっている。子育て中の母こそ、「啐啄の機」正にその時と考える。子育て支援での母親教育を期待する。

（平成16年掲載予定）

教育ウオッチング

高井 龍三

大学の大衆化が進み、どこの大学も学生気質の変化にとまどっています。なかでも自我の確立や社会性の形成に未成熟な面が目立つ学生が多くなり、その結果、将来の目標や明確な学習意欲の確認もないままに入学した、いわゆる目的意識のはっきりしない学生が増え、その対応に苦慮しています。私の所属する短大では、その対策の一環として平成５年度から１年生に基礎ゼミと称する必修授業を設け、学習興味・関心をそそる手ほどきをはじめ、知的好奇心の喚起に努めています。

基礎ゼミは、学生15人ほどの少人数編成で、指導教員を中心に学生相互の親密な関係を醸成し、そこを出発点に、短大で学ぶことの意義や学問研究の何たるかを学びます。まずここでは、ただ漫然と授業を受け、試験に通ればそれですむ、といった受身の姿勢を払拭し、自発的な研究姿勢を培い、学問研究と対峙する感性と活力を身につけ、２年生になって取り組む「卒業研究」に備えます。

学生は、この基礎ゼミを指導教員の名を冠して○○ゼミと呼び、強い帰属意識を抱いています。結果として教室での私語は減り、「卒業研究」の質も高まり、予想以上の効果を挙げ、目下、教育の改革・改善の必要性を実感しています。

（№50　平成７年11月）